本解「沈清クッ」と説経「松浦長者」(上)

金　賛　會

はじめに

福田晃氏[1]は、「毘沙門天の本地」の背後に唱門師の前身であった法者・梓巫女たちの巫祖神話を垣間みている。韓国の「沈清傳」もこれと同じ巫覡文学に属するもので、「竹生島の本地」の類話とすべきもの、比較研究の必要性などについてすでに論じられている。また、真下美弥子氏[2]は、韓国の「沈清歌」は、主人公が女である点など、細部においても「さよひめ」にきわめて近いモチーフを持っており、この「さよひめ」は、「法妙童子」の改作というよりは、むしろ女性を主人公とする先行の物語をもとに作られたものであろうと論じられている。また、兵藤裕己氏[3]は、『松浦長者』の場合、他の五説経などに較べて日本根生いの語り物らしくない。その伝播者は、韓半島と九州およびその間をつなぐ済洲島・対馬・壱岐の盲僧・盲覡なのであろうか」と、日韓巫俗レベルでの密接な交流を想定されている。また、韓国においても、金台俊氏[4]、張徳順氏[5]、鄭夏英氏[6]などによって、両者の関わりが指摘されている。これらの指摘を手掛りとして、今は、本解(ポンプリ)「沈清クッ」と説経「松浦長者」との関わりの一端を明らかにしたい。勿論、現在の韓国のムーダンの祭文をもって、日本の中世における本地物語と直接、比較することは、乱暴な方法と言わねばなるまい。というのは、韓国の現在におけるムーダンの伝承と日本の中世のそれとは、時間的・空間的隔りと信仰圏の相違があり、また、韓国のムーダンの伝承に準ずるものが今のところ、日本の本土に見当らないという点などである。つまり、その原話の成立までにはもう少しの段階を考えてみなければなるまい。

一、「沈清クッ」と「松浦長者」の叙述

「沈清クッ」は、プノリ(男巫が杖鼓(チャンゴ)・鉦・銅鑼などで、新しいクッの始まりを知らせる一種の序奏音楽)が演奏される中で、ムーダンが快子(袖のない戦服)を着て笠をかぶり、片手には扇

を持ち、片手には神竿（花）を取って出てきて、それにあわせて踊りを踊って巫歌を唱えるものである。それは、

沈清クッ　を何故するのかと言うと、この世の人々においていちばん肝心なのは目です。…と、ムーダンが自由なリズムによって語りはじめるもので、漁夫や老人などの目がよくなるように、巫神の沈清・沈盲人の由来を途述するものである。その本解は、およそ、次のような梗概にまとめることができるのである。

発　端

宋の時代、黄州桃花洞に沈鶴圭という盲人がいて、妻の郭氏に養われる。夫婦は子のないことを嘆き、神仏に申し子をして、天女が前生の罪によって天下りする夢をみて、美しい沈清を得る。〔申し子祈誓・姫君誕生〕

展開①

㈠　出生後、母は産後別症という病でなくなる。沈清は七歳の時から父の代りに物乞いに出る。〔母の死〕

㈡　沈奉事（沈盲人）はある日、夢恩寺の托鉢僧から白米三百石を寄進すれば、開眼できるという話を聞いて勧進帳に名を書き入れる。その話を父から聞いた沈清は神に父の目開きを祈る。〔父の寄進約束・沈清の祈願〕

㈢　沈清は、南京への途中の印塘水という海の竜王の人身御供を求めている商人に白米三百石で身売りを約束する。〔姫君の身売り〕

展開②

㈠　当日、始めてその事情を聞いた父は、嘆き悲しむ。沈清は父を慰め、船に乗って印塘水に着いた。沈清の身は清められ、水に入れられる。〔姫君の流浪・生贄〕

㈡　沈清の孝心に感じた神（玉皇上帝）は、竜王に命じて、竜宮でもてなさせる。〔姫君の救助〕

結　末

㈠　神から沈清を人間界へ帰らせよとの命が下り、竜王は蓮の蕾に入れて、水の上に送り出す。商人らはその花を皇帝に献上する。ある夜、花蕾が開き、天女玉女が現われる。その後、沈清は皇后となる。〔姫君の栄華〕

㈡　沈清は、帝に盲人救済を願い、国中の盲人たちを宮中に呼びあつめ、宴会を催し、乞人同様の父と再会する。〔親子再会〕

㈢　天界から鶴が降りてきて、目を何度も撫でさすると父の両眼が開く。同時に何万人の盲人たちの目も開く。〔開眼〕

㈣　沈清および父の沈盲人はともども巫神に祀られる。〔神々示現〕

そして、最末尾は諸伝承によって異同はあるが、巫楽に合せたムーダンの踊りと祈願のことばが唱えられる。すなわち、邊蓮湖氏[7]口誦本は、開眼と親子再会の喜びを語ってから〈沈清の祈願〉のところでは、「よい目を下さるように沈盲人（沈奉事）を祀ります」と結んでいる。また、金福順氏[8]口誦本は開眼と再会の喜び、親孝行すること、老人の目を守ってくれること、村の安泰を祈って、「踊りながら遊んでみよう。オ〝シクナートード、オ〝シク

チョッシクよし、キワジャよし〳〵」と、めでたし、めでたしと結んでいる。

次は、「松浦長者」叙述であるが、それは、

たゝいまかたり申御ほんぢ、国を申せはあふみのくに、ちくぶしまの、べんざいてんのゆらいをくはしくたつね申に…（上方版）

去程（ことば）に、あふみの国ちくぶ嶋、べん才天のゆらいをくわしく尋申に…（江戸版）

と始めるもので、竹生島の弁才天の由来を叙述する本地譚である。その本地譚は、上方版によって、次のような梗概でまとめることができるものである。

初段

㈠ 大和国壺坂に松浦長者がいた。名を京極殿という。夫婦は子のないことを嘆き、長谷観音に申し子をしてさよひめをもうける。〔申し子祈誓・姫君誕生〕

㈡ さよ姫の四歳の折り、長者は病死し、家は没落する。〔母の死〕

㈢ 父親の十三年忌となったが、法事を営む費用がないので、さよ姫は身を売って父の菩提を弔おうと決心する。〔父の法事・身売りの決心〕

㈣ 奥州むつの国安達郡の池に大蛇が住み、毎年、美しい娘を人身御供に供えることになっている。こんかの太夫の番に当り、太夫は娘の身替りの姫を買い求めて都へのぼる。〔商人の上京〕

二段目

㈠ 太夫は都では身を売る者をみつからず、奈良へ行って、春日明神の告げで松谷のさよ姫を尋ねる。さよ姫はいけにえになるとは知らずに砂金五十両で身を売る。さよ姫はその代金で父を供養する。〔姫君の身売り〕

㈡ さよ姫から事情を聞いた母は嘆き悲しむが、太夫は姫君を養子にすると偽り、連れて陸奥へ出発する。〔母の嘆き〕

三段目

㈠ 母は娘を売られた悲しさ・恋しさのため、物狂いとなって、ついに両眼を泣きつぶす。〔母の盲目〕

㈡ 奈良の松谷を発ったさよ姫は、清水寺で旅の安全を祈願し、山科・四の宮河原を経て、逢坂で延喜帝の第四の皇子・蟬丸を伏し拝んで、大津打出の浜へ下って八橋に着く。〔逢坂山の蟬丸・姫君の流浪〕

四段目

さよ姫は、浜名湖を経て陸奥国安達郡の太夫の屋形に着く。太夫は座敷を飾りたて、姫の身を清める。姫君は大蛇の人身御供になるという事情を聞いて倒れ伏して、嘆き悲しむ。太夫の女房も同情の涙を流す。

五段目

㈠ さよ姫は綱代の輿に乗せられ、十八町離れた築島に送られ、三段の棚の上に供えられる。〔人身御供〕

(二) さよ姫が父の形見の法華経を取りだし、高らかに誦みあげると、大蛇は十七・八の貴婦人と現われ、成仏に感謝して姫君に如意宝珠を与える。〔法華経読誦・竜女成仏〕

六段目

(一) 大蛇は、自分は伊勢の二見が浦の者であるが、継母に憎まれ、行方も知らず、人商人にたばかれ、人柱に沈められた恨みによって大蛇になったと、その素性を名のる。〔来歴譚〕

(二) さよ姫は竜の頭に乗せられ、故郷の奈良へ帰って、目を泣きつぶし、物狂いとなっている母と再会する。〔親子再会〕

(三) さよ姫は、その母に抱きつき、大蛇からもらった如意宝珠を両眼に押しあて、二・三度撫でると、母の両眼はたちまち開いた。〔開眼〕

(四) 二人は松谷に帰って、再び長者として栄えた。奥州へ使いを立て、太夫夫婦を召して家臣として信頼し、再び松浦長者の跡を継がせた。〔姫君の栄華〕

(五) 竜はそのまま昇天し、後、壺坂の観音に、さよ姫は八十五歳に大往生を遂げ、竹生島の弁才天に祀られた。〔神々示現〕

そして、最末尾は、

かのしまにて、だいじやに、ゑんをむすばせ給ふゆへに、かうべに、大じやをいたゞき給ふ也、此しまと申せしは…竹の三本おへ出たり、さてこそ、今の当代まで、ちくぶしま共申也

と竹生島の由来をあげ、

いきたるおやには申に及はす、なきあと迄もかう〳〵をつくすべし、又女人をまもらせ給ふゆへ、我も〳〵と、ちくぶしまへ、まいらん人はなかりけれ、身をうりひめの物かたり、せうこも今もまつたいも、ためしすくなき次第とて、かんせぬ人はなかりけれ

と、親孝行すること、竹生島・弁才天の加護などを主張しながら、その信仰の宣教する形を取って結んでいる。

二、「沈清クッ」と「松浦長者」の異同

右の叙述によって両者のモチーフの異同を対応させて示すと、およそ次のようになる。

発		説経「松浦長者」(上方)
(一)〔冒頭文〕	「沈清クッ」をする理由	本地物の形式
(二)〔父母〕	高貴な血筋	松浦長者・京極殿
(三)〔申し子誕生〕	神仏の申し子	長谷観音の申し子
	「沈清クッ」(本解)	

端	㈣〔前生譚〕〔来来譚〕	四月八日、夢を見る。一人の仙女が鶴に乗って降りてきて、自分の来歴を言う。	観音は長者夫婦の前生譚をする。父は信濃の国の狩人で、母鳥と十二の飼子を焼死させた罪、母は近江の国の大蛇で、たくさんの鳥類・畜類を取った因果によって長者に生れる。（江戸版）
展	㈠〔親の死〕	産後別症	姫君四歳の時、風の心ちとなり、三十六を一期とし、あしたのつゆとなる。
展	㈡〔親の盲目〕	幼きより盲人。	娘を売られた悲しみ、恋しさで、両眼を泣きつぶす。
開	㈢〔姫君の身売り〕	父の目の開眼（平癒）のため。	父の菩提（十三年忌）を弔うため。
①	㈣〔老僧の予言〕		春日明神が八十ばかりの老僧に身を変化、現れ、姫君のいる所を教えてやる。
展	㈠〔人身御供〕	竜王	大蛇（竜）
展	㈡〔身売りの代金〕	白米三百石	五十両
展	㈢〔人買商人の条件〕	十五歳の処女。	夫（男）の肌をふれる眉目よき姫（江戸版）。
展	㈣〔逢坂山の蟬丸〕		四の宮河原・逢坂で延喜帝の第四の皇子を伏し拝む。
開	㈤〔姫君の救助〕	天帝の命を受けた竜王の侍女。	法華経の功力によって成仏した大蛇の姫。伊勢の

②		沈清は皇帝に自分の来歴を言う。父の盲目のことが一生の恨み。	二見が浦の者。継母に憎まれて行方も知らず、人商人にたばかれた恨み。
結	㈠〔親子再会〕	沈清は、乞食・鬼神同様の父と再会。竜宮―天から降りてきた母（玉真夫人）と再会。	物狂いとなって袖乞いをしている母と再会。
	㈡〔開眼〕	天界から鶴が降りてきて目を何度も撫でさする。別本では、天界で玉真夫人（沈清の母）の送った鶴が薬水を落すと、目が開く。同時に何万人の盲人たちの目も開く。	玉を両眼に押しあて、二・三度撫でると目がたちまち開く。
末	㈢〔姫君の栄華〕	皇后	長者
	㈣〔神々示現〕	沈清・沈奉事（巫神―目の神・豊漁神）母（玉真夫人―薬師）。	姫君は八十五歳に大往生し、竹生島の弁才天、大蛇は壺坂の観音となる。

右のように両者は、そのモチーフ構成においてきわめて近似すると言えるものである。勿論、両者は民族・文化の相違によってその構想や趣向などにおいては相当の隔りがある。大きな相違は、前者が韓国に現在、伝承されているムーダンの祭文であるのに対して、後者は日本の中世における本地物語というものである。また、前者が韓国の東海岸地方（日本海側）を信仰の背景とするのに対して、後者は長谷観音・壺坂観音などの観音信仰と琵琶湖をめぐる在地の水神信仰を背景するなど、信仰集団の相違がある。

が、それでも両者がたがいに響きあい、ある点ではその源流を一つとしていることは否めないように思われる。されば、その共通と異同をそれぞれのモチーフ構成によって検討しておきたい。

まず発端の部。㈠の〔冒頭文〕について、韓国の本解は、ムーダンが沈清クッを唱える主旨を述べる。それは漁夫や老人などの目がよくなるように、ムーダンが巫神の沈清・沈盲人の由来を叙述するものである。これに対して説経「松浦長者」は、竹生島の弁才天の由来を叙述する本地物の形式を取っている。㈡の〔父母〕、

㈢の〔申し子誕生〕のモチーフは、主人公が常の人ではなく、選ばれた女性であることを主張しようとしたものである。しかし、韓国の本解は、申し子の主対象が仏であるものの、名山・大刹・霊神堂・古廟・城隍祠・諸仏菩薩・帝釈天など、土俗信仰・儒・仏・仙思想の習合した申し子とするのに対して、日本のそれは、当代の支持の強い長谷観音の申し子としていて、やがてはその意義が論究されねばならない。㈣の〔前生譚〕・〔来歴譚〕について、両者はともに申し子祈願の夢の中で語られているという共通点を持つ。しかし、前者は申し子が沈奉事の妻・郭氏の夢の中で現われ、自分の来歴を言うものであり、後者は観音が長者夫婦の夢に現われ、前生譚を言うものである。また、後者は前生の因縁によって授ける子種がないというもので、それを言わぬ前者とは相当の隔りがある。すなわち、これはすでに指摘されるように[9]、「みしま」（奈良絵本）、「いづはこねの本地」（刊本）、「月日の御本地」（丹緑本）、「しやうるり」（古絵巻）、「つきみのさうし」（古活字版）、「千手女物語」（写本）、「子易物語」（寛文刊本）、「びしやもん」（写本）、「しんとく丸」（佐渡七太夫本）など、室町時代物語・説経正本などに共通的に見えるモーフとも言える。

次は展開①の部。㈠の〔親の死〕について「沈清クッ」は、母が沈清を生んで三後別症という病で、「松浦長者」は、父が姫君の四歳の時に「風の心ち」となってなくなったとあって、前者は母、後者は父とする異同が見られる。㈡の〔親の盲目〕についても、本解は幼きより盲人、説経は娘を売られた悲しみ・恋しさで狂乱し、目を泣きつぶしたとある。この盲目のモチーフは、両伝本の源流を想定するのに重要な意義を有するものと言える。㈢の〔姫君の身売り〕について、「沈清クッ」は父の目の平癒（開眼）のために、「松浦長者」は父の菩提（十三年忌）を弔うためという相異はあるが、いずれにしても父のための身売りである共通点を持つ。この身売りのモチーフは両者の話の展開の上で重要な構成要素となっている。すなわち、この身売りを契機として姫君の流浪・苦難が始まるのである。この人身売買譚は後に考究すべきものであるが、両者とも当代に実際、起きた話を導入したものと言えよう。たとえば、韓国の『三国遺事』巻五・「貧女養母」、『三国史記』・巻四十八・「孝女知恩」、『朝鮮寺刹資料』[10]II所収「玉果県聖徳山観音寺事蹟」、『説経正本』の「さんせう太夫」・「小栗判官」、古浄瑠璃の「阿弥陀胸割」・「村松」・「安口判官」、謡曲の「自然居士」・「三井寺」・「角田川」、御伽草子の「ゆみつぎ」などはこのモチーフによるものと言えよう。ただし、「松浦長者」のさよ姫と商人はいずれも親子愛から発した人身売買[11]と言えるもので、韓国の「沈清クッ」と違った展開を見せている。また、身売りの決意は、「沈清クッ」は父の沈奉事が白米三百石を寺に施主すれば目が開くという話を僧から聞いてその約束をし、その後、父からその話を聞いた沈清は、悩む父を慰めて身売りの決意をする。また、「松浦長者」は、姫君が自らの意志で身売りを決意し、春日明神に人買人に引合わせてほしいと祈願に行った後、興福寺で高僧の説法を聴聞し、さらに身売りの決意を

新たにしたとあって、僧の説法を直接に聞くのが前者は父の沈盲人となっているのに対して、後者は姫君となっている相違が見られる。しかし、両者とも寺の僧の説法は重要視されていない点においては共通点を持つと言えよう。また、両者は信仰集団の相違によってその趣向を大いに異ならせている。すなわち、前者は白米三百石を寄進したお寺は話の展開上、何の意味を持ってこないのに対して、後者は、すでに指摘されるように[12]、この物語の管理に従した興福寺系の唱導者の投影が伺えるのである。㈣の〔老僧の予言〕については、「松浦長者」は、こんかの太夫を不憫に思った春日明神が八十ばかりの老僧に変化、姫君の所在を教えてやるのに対して、「沈清クッ」はこのモチーフを欠落している。

次は展開②の部。㈠の〔人身御供〕について、「沈清クッ」は、印塘水という海の竜王、「松浦長者」は奥州安達郡の池の大蛇の生贄に供えられる。しかし、両者は信仰圏の相異によってその趣向は相当の隔りがある。すなわち、韓国の印塘水という海の竜王、奥州安達郡の池の大蛇の説かれることの意義が問われねばならないのである。㈡の〔身売りの代金〕については、「沈清クッ」は白米三百石、「松浦長者」は五十両とある。㈢の〔人買商人の条件〕についても、「沈清クッ」は十五歳の処女、「松浦長者」（江戸版）は夫の肌をふれぬ眉目よき姫とある。㈣の〔逢坂山の蟬丸〕のモチーフは、「松浦長者」と『さよひめ』だけに見られるもので、当物語の原話を考えるのに重要な意義を有するモチーフとなっているのである。つまり、すでに福田晃氏[13]によって詳しく紹介されているように、展開①の㈡〔親の盲目〕、結末の㈡〔開眼〕とかかわって、四の宮河原・逢坂山の蟬丸の神明の説かれることの意義が問われねばならないのである。㈤の〔姫君の救助〕については、「沈清クッ」は竜宮城の仙女たちが沈清を御輿に乗せてつれて行ったとあり、「松浦長者」はさよ姫が父の形見の法華経を読誦すると、大蛇は十七・八の貴婦人と現われ、尊い経の功力を語り、成仏の礼として竜宮城の如意宝珠をさずける。そして大蛇は自分の前生を語り、後、さよ姫を竜の頭に乗せて刹那のうちに大和の池のほとりへつれて行ったとある。後者のように、人柱にされた姫君がその怨念ゆえに荒ぶる蛇体と化して、人々に祟りをなすという発想は、言うまでもなく御霊信仰のなかでおこったものであるが、その怨念に苦しむ神が仏法を保持することによって祭祀されるとき、その祟りを収めたという発想は、三熱に苦しむ神が仏法によって救済されんという神仏習合思想の流れに従うもので[14]、それを言わぬ前者とは相当の隔りがある。ちなみにすでに福田晃氏[15]が指摘されるように、法華経が介在した類話としては、『神道集』巻八「上野国那波八郎大明神事」、室町時代の物語草子『法妙童子』や奥浄瑠璃『檀毘梨長者』などがあげられる。また、大蛇からもらった如意宝珠は、結末の㈡〔開眼〕とかかわって当物語の原話を想定するときに問題とせねばならぬものである。また、『長谷観音験記』[16]に住吉の盲目の藤五という者が長谷観音に奉仕して開眼したという話や、また人買人に身を売った孝行娘が観音経読誦の功力によって救われたとあって、長谷観音信仰とのかか

わりもいずれ論究されねばならないことである。

次は最後の結末の部。㈠の〔親子再会〕のモチーフは、展開①の㈢〔姫君の身売り〕、展開②の㈤〔姫君の救助〕、㈡の〔開眼〕のモチーフとかかわって、当然用意されねばならなぬモチーフである。本解は姫君が乞食・鬼神同様の父、説経は物狂いとなって袖乞いをしている母と再会したとある。㈡の〔開眼〕のモチーフも、展開①の㈡〔親の盲目〕、展開②の㈣〔逢坂山の蟬丸〕のモチーフとともに、当物語の原話を考えるのに重要な意義を有するものである。「沈清クッ」は天界から鶴が降りてきて、目を何度も撫でさすると父の目が開き、また、別本では天界で玉真夫人の送った鶴が薬水を落すと目が開く。また、「松浦長者」は大蛇からもらった如意宝珠を両眼に押しあて二・三度撫でると、母の両眼がたちまち開いたとある。別稿[17]で述べたように本解は、この〔開眼〕のところで話を終息させ、開眼にその叙述の中心を置いて、結末の㈣〔神々示現〕とかかわって、沈清・沈奉事が目の神（巫神）に祀られる理由を正当化させている。ちなみにこの盲目のモチーフを『説経正本』に求めれば「信徳丸」においても、「かの鳥箒を取り出だし、両眼におし当て、『善哉なれ平癒』と三度撫でさせたまえば、ひしとつぶれし両眼、明らかになりしかば」とあって、類似の趣向が見られる。㈢の〔姫君の栄華〕、㈣の〔神々示現〕についても、「沈清クッ」は、沈清と沈奉事はともども巫神、「松浦長者」は、大蛇は壺坂の観音、さよ姫は竹生島の弁才天にそれぞれ祀られたとある。しかし両者は、その信仰圏の相異によってその趣向を大いに異ならせている。つまり、発端の㈢、展開①の㈡、展開②の㈣・㈤、結末の㈡のモチーフとかかわって、韓国の東海岸地方（日本海側）という信仰基盤と、竹生島・壺坂の神明の説かれることの意義が問われねばならないのである。

〔注〕

(1) 福田晃氏「巫覡文学の展開―日韓の比較を志して」（『伝承文学研究』第三十三・昭六十一）。
(2) 真下美弥子氏「奥浄瑠璃『竹生島の本地』論」（『伝承文学研究』三十三・昭六十一）。
(3) 兵藤裕己氏「平家琵琶琵琶溯源」―バンソリ・説経・盲僧琵琶など―」（『国文学解釈と鑑賞』昭六十二・三）。
(4) 金台俊氏『朝鮮小説史』（ソウル学芸社　昭十四）。
(5) 張徳順氏『国文学通論』（ソウル新丘文化社　昭四十七）。
(6) 鄭夏英氏「沈清傳の題材的根源に関する研究」（ソウル大学博士学位論文　昭五十八）。
(7) 金泰坤氏『韓国巫歌集』Ⅰ（ソウル集文堂　昭四十六）所収。
(8) 徐大錫・崔正如氏『東海岸巫歌』（ソウル螢雪出版社　昭五十七）所収。
(9) 成田守氏「『竹生島の本地』」（『奥浄瑠璃の研究』昭六十）。
(10) 『朝鮮寺刹資料』Ⅱ（朝鮮総督府内務部地方局　明四十四）。
(11) 鳥居明雄氏「『三井寺』とさよ姫説話」（『都留文科大学研究紀要』第十八集　昭五十七）。
(12) 森山重雄氏「人柱と松浦さよ姫の生贄幻想」（『近世の語りと劇』昭六十二）。
(13) 福田晃氏「甲賀三郎譚の管理者㈢―信州滋野氏と巫祝唱導―」

（『神道集説話の成立』昭五十九）、「逢坂山の蟬丸」（『京都新聞』平二・一・十八、『京の伝承を歩く』平四）。

（14）村山修一氏『本地垂迹』第四章「奈良朝における神仏習合の進展」、福田晃氏「那波八郎大明神説話の成立」（『神道集説話の成立』昭五十九）参照。

（15）福田晃氏「那波八郎大明神説話の成立」。

（16）『続君書類従』巻第七百九十九下末「釈家部」八十四・第三十三話、同書三十一。

（17）拙稿「本解「沈清クッ」考—説経「松浦長者」とかかわって—」（『説話・伝承学』創刊号に掲載予定）。

（キム・チャンフェ　本学大学院博士課程）